13 ヶ所、実施しなかった(できなかった)所は 16 ヶ所である(表2)。

本調査の趣旨には「賛成」「やや賛成」ではあるが調査を実施しなかった(できなかった)理由としては、「定員一杯の状況で業務上困難だった。」「日課におわれ時間がとれなかった」「児童の状況が不安定であり行える状況ではなかった」「調査対象の保護児童がいなかった」「入所児童の協力が得られなかった」「このアンケートでは実態が反映されない」との記述がみられた。このことから、調査の日時や方法等を変更できれば実施が可能となった所もあったと思われる。また、調査の趣旨に「やや反対」「反対」であり、「入所背景や入所時間がそれぞれ異なるうえ、答えることや考えることで生活面に支障をきたす児童がいたり、アンケートを正確に理解できない児童がいるため」「アンケートの実施により不安定になる可能性のある児童がいたため」「入所児童も多く、また調査しなくても結果は予測できている」等との理由で調査を実施しなかったとした所も、3ヶ所あった。

③実施方法

調査の実施方法は、「全員いっせいに」実施した所が40ヶ所、「数人ずつ」分けて実施した所が 2 ヶ所、「個別に」実施した所が 8 ヶ所であった(表 3)。「数人ずつ」や「個別に」実施した所では、児童福祉司や児童心理司が調査を実施していたり、対象児童が5人以下と少なかったり、また、大規模施設で数人ずつ設問を読み説明しながら実施した所などそれぞれであった。

調査の実施者は、一時保護所の「児童指導員」や「保育士」が一番多く、合わせて 31 ヶ所である。その他、「一時保護所の課長(係長)」を実施者とした所も 19 ヶ所あった。「その他」では、「保護担当部長」や「実習生(大学生)」というものも見られた(表4)。

調査を実施した時間帯は、「学習時間」が最も多く 36 ヶ所、「自由時間」が 15 ヶ所であった。「その他」として、「スポーツの時間」、「読書の時間」がみられた(表5)。

調査実施の際には、「一問ずつ読み上げた」あるいは、「一問ずつ説明しながら読み上げた」所を合わせると 20 ヶ所、「子どもに任せた」「質問がある場合のみ説明した」を合わせると 23 ヶ所と、ほぼ半数ずつであった(表6)。「その他」の 8 ヶ所は、調査実施の「趣旨説明は丁寧に行った」等、趣旨説明に関する記述がほとんどであり、本調査の趣旨が子どもたちに伝わるよう丁寧に説明をしてくださっていた。

調査を実施しての職員の感想としては、「よかった」「ある程度よかった」を合わせると 42 ヶ所、「あまりよくなかった」は 5 ヶ所で、「よくなかった」との回答は 0 ヶ所であった(表7)。

④アンケートの今後の実施可能性

また、今後のこのようなアンケートを独自に実施することについては、「すでに実施」している所が 8 ヶ所、「実施を検討」している所が 17 ヶ所、「実施はむずかしい」とする所が 7 ヶ所、「その他」が 18 ヶ所であった(表8)。「実施を検討」している所のコメントとしては、「当所でも検討したいと思い、参考資料など集めているところなので質問項目など参考にさせてもらいたい。」「初めての経験でとまどいはありました」「普段なかなか聞けないところもあり、よかったと思う」等、このような全国的な調査は過去になくとまどいながらも調査を子どもたちの意見表明の機会ととらえ、前向きに検討している様子がうかがえた。一方、「実施はむずかしい」とした所のコメントとしては、「知的障害児に対しては答える事が困難であった」「特に必要ないと思われる」という記述であった。知的障害児であっても意見や思いをどのようにくみとっていくのかは課題であるといえる。

また、「その他」とした所のコメントとしては、単に「どちらでもよい」「特に実施はしない」「児童集団が安定している状況でなければ実施は難しい」「実施するタイミングが難しい」というもの、あるいは「聞き取り形式で実施している」「内容は少ないが退所前に感想などを個別に聞いて

いる」「職員サイドがしっかりと意図を理解し定期的に実施しその意見をどう活用していくか検討したうえでないと意味がない」というもの、中には、「アンケートという形については、その必要性を感じないしアンケートでしか得られないものがあるとすれば、むしろ処遇内容(指導)そのものに問題があると思う」との指摘もあった。

やはり、子どもへ調査は、実施の趣旨を調査者も理解し、その有効性を感じたうえで、その実施の条件を個々の一時保護所の状況に合わせて行っていくことで、更に効果的であるようである。

一方、「現況では保護所が子ども達に対して過重なストレスの場となることが多く、安心して生活できる場とは言い難い。このようなアンケートを実施し、子ども達の声を生で拾っていくことで今後の改善につながっていく可能性があることはとてもよいことであると思う。」「保護所での生活について積極的に意見表面する契機になればと思う。(子ども会議などを設けているが、保護所の課題が子ども視点からよりイメージしやすくなったと思う。)」「今後も当事者の意見は必要でしょう」と、当事者である子どもたちの声をとおして、一時保護所の課題を追究していくという、まさに子ども一人ひとりの権利を守ることを高く意識されているコメントもみられた。

⑤本調査へのご意見

本調査についての意見を自由に記述してもたったところ、「大人を信用していない子供達が多く、保護所の当事者が調査しても素直に回答してもらえない部分があると感じた」「入所したての子は不安や不満もあり、否定的にとらえており、ある程度経過した上で、(ex 退所時に)聞いた方がいいだろう」「調査日を限定しないほうが良い」「このアンケートを各児相で分析、修正したもの」にすれば実施は可能等、調査の実施方法に関する提案が多くみられた。また、「その時の精神状態や構成メンバーによって左右されるようでした」「相談種別によって大きく結果が異なってくるような印象をもちました」「在所日数だけでなく、出来事(例:きまりを破り職員に叱られた)の有無によって反応はちがってくると思う。分析の際にはそうした要因も考慮する必要があるのではないか」とのご意見もあった。アンケートの実施方法については、今後の検討課題であるといえよう。

7. 調査結果

(1) 回答者の基本属性

回答者の性別は、男子が 224 人、女子が 207 人と、ほぼ半数ずつであった(表 10)。回答者は、9 歳から 18 歳までの子どもで(表 11)、平均年齢は 12.4 歳であった。小学生の 169 人、中学生の 218 人、高校生の 29 人からの回答が寄せられた(表 12)。主訴は、「養護」が 21.6% 、「虐待」が 39.2%、「非行」が 20.9%、「その他」が 12.3%であった(表 13)。一時保護所入所期間(週数)については、調査日の時点で 1 週目の子どもが 20.6%、2 週目の子どもが 20.0%、3 週目の子どもが 15.1%、4 週目の子どもが 10.2%と続き、24 週目という子どもも 2 人いた(表 14)。平均保護日数は 26.7 日であった。

8月3日における一時保護所の入所児童数の合計は 1,034 人で、そのうち小学生以上は 794 人である(表9)。調査票の回答は小学校4年生以上であるため正確にはわからないが、回答のあった一時保護所のうち、少なくとも 54.3%の小学生以上の回答が得られた。

また、子どもたちの居室については、子どもたちの回答によると、「4 人部屋」が最も多く 32.7%、次いで「3 人部屋」が 20.6%、「2 人部屋」が 12.8%、「5 人部屋」が 11.4%、「一人部屋」が 10.4%と続く(表 34)。6人～10 人部屋までの回答も見られたが、居室と寝ている部屋を、その時々の保護人数や性別、年齢等、状況によって変えているといった所も見られ、「寝ている部屋」が大部屋にならざるを得ないという所もあった。

(2) 子どもたちの意識

①楽しい事、嫌な事について

設問1～設問4までは、子どもたちが、一時保護所での生活を、全体的にどのように感じているのかを知るために、得に「楽しいこと」と「嫌なこと」について尋ねた。

「ここでの生活で楽しい事はあるか」と尋ねたところ、「よくある」が 37.8%、「時々(少し)ある」41.8%となり、約 8 割の子どもたちが何らかの楽しさを感じていることがわかった(表 15)。一方、楽しいことが「全くない」と答えた子どもたちも5.6%おり、その子どもたちの多くは、次の設問項目「ここでの生活で嫌なことはあるか」にて、「よくある」と回答していた。

「楽しいこととはどのようなことか」を自由記述で尋ねたところ、「他の子どもたちとの関わり」に関する記述が 32.5%、「遊びや活動」の内容に関する記述が 30.0%、「食事や生活」全般に関する記述が10.1%、「職員との関わり」に関する記述が 5.1%みられた(表 36)。「他の子どもたちとの関わり」に関する記述では、「みんなで一緒にいる時(自由時間、運動、食事など)」、「友達としゃべる時」「友達といる時間は幸せです。・・・」「やさしい子達がいて、たのしく生活ができてると思う」などと感じている子どもが全体の約3割を占めた。「遊びや活動」に関する記述では、野球、サッカー、テニス、卓球、プール、バレー、ジョギングといったスポーツから、囲碁、将棋、ゲーム、マンガ、テレビをみる、CD を聴くといった余暇的な活動、また、散歩、キャンプ、調理実習、「いろいろなところへいったりすること」「海に行ったことです。・・・焼肉をしたことです。」「レクレーションとかがあるから大好きだし(レクレーション)楽しい！」など、ちょっとした外出やイベントも子どもたちには好評であった。「食事や生活」面に関する記述では、「自由時間が楽しい」「自由にできる(決まりの中で)」「・・・自由時間もある」など、集団生活の中での自由に触れている内容や、「おやつのとき」「おいしいごはんをいつもたべたりするから」と感じている子どもたちもいた。「職員との関わり」に関する記述では、「先生と話してることが楽しい」「先生と遊んだり、先生とかとスポーツをしたりすること」「先生が優しい」「担任の先生がたくさん面接してくれる」ことなどを楽しいと感じている子どもたちもいた。また、「その他」の記述には、「あんまり人が干しょうしてこないから楽にいきられるから逆にそれが楽しい」「親が面会に来てくれる時」といった記述、また、「ここが家よりはたのしくすごせる」「自分の『おや』がイナイこと。みんなの笑顔を見れること」など、家族と離れたことを挙げている子どももいた。

「ここでの生活で嫌なことはあるか」と尋ねたところ、「よくある」が 26.7%、「時々(少し)ある」が35.5%と約 6 割を占めた。一方、「全くない」と答えている子どもも 15.3%いた(表 16)。「嫌だと感じることはどのようなことか」を自由記述で尋ねたところ、「他の子どもとの関わり」に関する記述が29.0%、「規則や生活」全般に関する記述が18.7%、「職員」に関する記述が 5.3%、「家族」等に関する記述が 3.0%であった(表 37)。「他の子どもとの関わり」に関する記述では、「いじめられる」「ものをとられる」「からかわれる」「ケンカが多い」「たたかれたり、けられたりする」「なかまはずれ」「ぼうげんとかぼうりょくが多かった」「小さい子がうるさい」「・・・めしつかいにされる」など、子ども同士の「ケンカが毎日の様に」あったり、トラブルがあったりすること挙げている子どもたちがほとんどであった。「規則や生活」全般に関する記述では、「外出できない」「学校に行けない」「友達に会えない」「ケイタイが使えない」など自由に制限がかけられている内容、また「寝る時間が早い」「時間きっちりしすぎる」「9 時までしかテレビが見れない」「部屋で過ごしたい」「一人の時間がなかなかない」「ルールがたくさんある」など、「集団生活」を送る上での規則に関することを挙げている子どもたちがほとんどであった。「職員」関する記述では、「先生がきびしい(厳しい人がいる)」「おこるとこわい」などと共に、全体からみると数%ではあるが、「職員が自己感情を持ってくる」「差別される」「先生が気分悪くさす」

「先生がきびしすぎる(こわい)」と感じている子どもたちもいた。また、中には「福祉司の人やらがなかなかこないので話しがすすまない。」「ケースワーカーの先生に自分の思いがわかってもらえない時」など、自分の今後について不安である様子がうかがえる内容もあった。「家族」等に関する記述も、3%ではあったがあえて取り上げてみると、「お母さんや弟に会えないこと」「ここへ来てなれたけど、時々家に帰りたいと思うから」「お母さんではなく、おばあちゃん、犬に会いたくて泣いてしまうこと」と、複雑な心境も表れていた。「その他」としては、「生活が慣れない。息ぐるしいです。つまった感じがする。」「じょうほうてきなぶぶんがどんどんうすれていく自分がいや」「空気。ここに居ることが嫌だ」「人が出ていくとき」など、さまざまな思いが表れており、一時保護所での環境がかなりストレスである情況もうかがえた。

② 精神的な安定度について

設問5～設問8までは、子どもたちの睡眠、イラつき、悲しみ、頭痛腹痛といった精神的な状態について、子ども自身がどのように感じているかを尋ねたものである。それぞれの単純集計と共に、この4つの設問項目の回答について、個々の子どもたちの属性、及び「楽しいことはあるか(以下「楽しいこと」)」「嫌なことはあるか(以下「嫌なこと」)」の回答とのクロス集計を行った。ここでの子どもたちの属性とは、性別、保護週数、主訴、職員に対する反抗の有無についてである。なお、子どもたちの回答は、「よくある」と「時々(少し)ある」を合わせて「ある」群へ、「あまりない」と「全くない」を合わせて「ない」群として2群に分類し、集計を行った。

まず、「夜はよく眠れるか」を尋ねたところ、「よく眠れる」が26.5%、「まあまあ眠れる」が42.0%、「あまり眠れない」が24.6%、「全く眠れない」が6.0%であった(表17)。約3割の子どもたちが「あまり眠れない」「全く眠れない」と答えていることがわかる。「よく眠ることができるか」は、「楽しいこと」、の回答と有意な差がみられ(χ^2=10.466,df=1,p<.01)、また、「嫌なこと」の回答とも有意な差がみられた(χ^2=11.135,df=1,p<.01)。楽しいことがある子どもほどよく眠れると感じ、嫌なことがあると感じている子どもほど眠れないと感じている傾向があるといえる。

「イライラすることはあるか」を尋ねたところ、「よくある」が37.4%、「時々(少し)ある」が36.9%、「あまりない」が12.5%、「全くない」が12.3%となり、4人のうち3人の子どもたちがイラつきを感じていることがわかる(表18)。「性別」とのクロス集計では、イライラすることの「ある」割合は男女ほぼ半々であったが、「ない」割合では、男子63.6%、女子36.4%と大きな差がみられ、男子のほうがイライラを感じている割合が低い(χ^2=7.341,df=1,p<.01)。また、「保護週数」とのクロス集計の結果、保護期間2週目までの子どもたちの63.4%がイライラすることが「ある」と感じているのに対し、3週目以降になると82.8%の子どもが「ある」と答えており、保護が1～2週目の子どもたちと3週目以降の子どもたちとの間に大きな差がみられた(χ^2=20.321,df=1,p<.01)。保護週数3週目を過ぎると、子どもたちの8割以上がイライラを感じているということができる。「反抗の有無」に関しては、イライラすることが「ある」と回答した子どもたちの21.4%は、職員が「反抗あり」と感じているのに対し、普段イライラすることが「ない」と回答した子どもたちのうち職員が「反抗あり」と感じているのはわずか8.9%となり、子どもたちのイラつきは職員への反抗という形で表れているともいえる(χ^2=7.842,df=1,p<.01)。職員に対して反抗的な態度をとっていたり、職員が反抗を感じる子どもの多くは、子ども自身もイライラ感を募らせていることがわかる。また、「楽しいこと」が「ある」と感じている子どもほどイライラすると感じず、また「嫌なこと」が「ある」と感じている子どもほど、イライラする傾向が強い(「楽しいこと」χ^2=7.761,df=1,p<.01)、(「嫌なこと」χ^2=49.699,df=1,p<.01)。

「とても悲しくなることはあるか」を尋ねたところ、

「よくある」が 21.6％、「時々（少し）ある」が 31.8％、「あまりない」が 24.6％、「全くない」が 21.1％となり、約半数の子どもたちが「とても悲しい」と感じていることがわかる（表 19）。「性別」とクロス集計したところ、「ある」と答えた子どものうち男子が 39.1％、女子が 60.9％であるのに対し、「なし」と答えた子どもは、男子が 67.0％、女子が 33.0％と、性別により明らかな有意差がみられた（χ^2=33.032,df=1,p<.01）。男子よりも女子の方が、悲しみを敏感に感じている様子がうかがえる。また、「保護週数」とのクロス集計では、保護期間が 2 週目までの子どもたちの 43.9％が悲しくなることが「ある」と回答しているのに対し、3 週目を超えた子どもたちは 60.5％が「ある」と回答し、保護期間が長くなるにつれ悲しみを感じる子どもが増えている（χ^2=11.312,df=1,p<.01）。「嫌なこと」とのクロス集計でも、嫌なことが「ない」と回答した子どもたちのうち、悲しいことが「ある」と回答した子どもが 30.2％であるのに対し、嫌なことが「ある」と回答した子どもたちの 67.4％が悲しいことが「ある」と感じており、明らかな有意差がみられている（χ^2=53.333,df=1,p<.01）。

「頭が痛くなったり、お腹が痛くなることはあるか」を尋ねたところ、「よくある」が 37.1％、「時々（少し）ある」が 38.5％、「あまりない」が 21.8％、「全くない」が 1.6％となった（表 20）。4 人のうち 3 人の子どもたちが頭痛や腹痛を感じているということである。また、「全くない」との答えがわずか 7 名と極めて少なかった。

個々の子どもの「主訴」は、以上の4項目ではいずれも有意差がみられず、子どもたちの「主訴」と一時保護所内での子どもたちの精神的な状況とは関係がみられなかった。

③ 大切にされていると感じているかどうかについて

設問9では、「職員の人たちから大切にされていると感じることはあるかどうか」（以下、「大切にされている」とする。）について尋ねた。この設問は、さまざまな事情で家庭や学校、友達など、慣れ親しんだ環境から離れて一時保護所での生活を余儀なくされているという現状において、設備面や処遇面では不十分ではあっても、身近にいる職員から大切にされていると感じるだけで、子どもたちの安心感は大きく違うのではないかとの推測から作ったものである。

まず、「よくある」が 24.8％、「少し（時々）ある」が 42.0％と、7 割弱の子どもたちが、一時保護所内で職員に大切にされていると感じていることがわかった（表 21）。一方、「あまりない」が 19.7％、「全くない」が 11.1％と、3 割強の子どもたちが否定的な捉え方をしていることもわかった。

職員から「大切にされている」と感じることが「ある」と回答した子どもたちと「ない」と回答した子どもたちの、行動面での表れとして有意な差がみられたのが、職員に対する「反抗の有無」であった。職員が、反抗が「ある」と感じている子どもたちの 56.5％が、職員から「大切にされている」と感じることが「ない」と答えている。一方、反抗が「ない」と職員が感じている子どもたちのそれは 25.5％と大きな差がみられた（χ^2=25.258,df=1,p<.01）。職員が反抗を感じている子どもたちほど、職員から大切にされていないと感じている割合が高くなっている。これは、もともと大人への不信感を抱えて入所してきている子どもたちが、反抗的な態度やトラブルを起こすことで職員の叱責を受け、それにより職員から大切にされていると感じられず、また反抗的態度をとる、といった悪循環の表れということもできる。

この設問項目については、後述の「④サービス・設備面について」及び、「⑤職員からのアプローチについて」のなかで、クロス集計した結果について触れる。

④ サービス・設備面について

設問 10～設問 15 までは、主に一時保護所のサービスや設備面について尋ねた。

「食事はおいしいと感じるか」を尋ねたところ、

「よくある」が 60.1％、「時々（少し）ある」が 28.3％、「あまりない」が 7.4％、「全くない」が 2.8％となり、9 割近くの子どもたちにとっては食事が好評であることがわかった（表 22）。「大切にされている」とのクロス集計では、「食事がおいしい」と感じている子どもたちの 71.3％が「大切にされている」と感じ、「食事がおいしい」と感じることが「ない」子どもたちの 43.2％とは、大きな差がみられた（χ^2=14.368,df=1,p<.01）。

自由記述には、「朝食のパンがとびきりおいしい」「ぜいたくのごはんが食べられる」「焼肉をした」「夜おやつが出る」「アイスを食べれた」等が嬉しかったという記述と共に、「三食食べられる」「ちゃんとした食事ができた」「ご飯がおいしい。身長と体重がふえた」等、一時保護所に来てから規則正しい食生活を送ることができた点を嬉しいと感じている子どもたちもいた。一方、「おやつの量をふやしてほしい」「パンが毎日食べられるようになってほしい」「プリンを出してほしい」「いつでも水をのめるようにしたい」「野菜をもっと増やしてほしい」「ケーキが食べたい」「お菓子とか作りたい!!」「お茶やジュースをのどがかわいたときに飲ませてほしい」「ご飯の量をもっと少なくしてほしい」「ようじとおなじ 10 時のおやつがあってほしい」等、食事面に関する要望も多くみられた。

「他の子どもたちと離れて一人でいたい時に一人になれるか」を尋ねたところ、「なれる」が 33.2％、「少しなれる」が 26.9％、「あまりなれない」が 21.3％、「全くなれない」が 16.0％となり、約 4 割の子どもたちが、あまり（全く）なれないと感じていることがわかった（表 23）。また、「大切にされている」とのクロス集計では、「一人になれる」ことが「ある」と感じている子どもたちの 74.1％が「大切にされている」と感じることが「ある」と回答している一方で、「一人になれる」ことが「ない」と回答した子どもたちのそれは 59.1％であり有意差がみられた（χ^2=10.185,df=1,p<.01）。自由記述においては、「みんながケンカをよくするから。一人になりたくてもなれない」「小さい子がうるさい」「一人部屋じゃないから、一人になる時間があまりない」ことを嫌なこととして挙げていたり、また、要望として「もっと一人になりたいときになれるようなスペースがほしい」といった記述や、「へやを二人ずつぐらいにしてほしい」、「一人で部屋を使える時間が欲しい。低学年と高学年をわけてほしい」と、必ずしも個室を要望しているわけではないが、よりプライバシーが大切にされる空間を求めているといえる記述がみられた。

「勉強でわからないところは、教えてもらえるか」を尋ねたところ、「よくある」が 47.1％、「時々（少し）ある」が 34.1％、「あまりない」が 11.1％、「全くない」が 4.2％であった（表 24）。また、「大切にされている」とのクロス集計の結果、「教えてもらえる」ことが「ある」と回答した子どもたちの 73.0％が「大切にされている」と感じ、「教えてもらえる」ことが「ない」と回答した子どもたちの 45.5％とは、明らかな有意差がみられた（χ^2=19.581,df=1,p<.01）。自由記述には、「べんきょうがたくさんできるからたのしい」「書ける漢字がふえた」「百マスの点数があがったりしたら」「勉強が分かったこと（教えてもらえたこと）」が嬉しいとの記述もあり、保護所内での学習指導が、子どもたちの自信につながっている様子がうかがえる。

「外出や運動できずにイライラしたことがあるか」を尋ねたところ、「よくある」が 32.7％、「時々（少し）ある」が 24.4％、「あまりない」が 15.3％、「全くない」が 26.7％であった（表 25）。これを、「小学生」、「中学生」、「高校生以上」に分けてクロス集計したところ、小学生で「ある」と回答した割合は 45.8％だったのに対し、中学生では 64.2％、高校生以上では 70.5％となった（χ^2=16.321,df=2,p<.01）。また、保護期間が 1 週目の子どもの 47.1％が「ある」と答えているのに対し、2 週目の子どもの 54.1％が、3 週目以降の子どもたちの 62.2％が「ある」と答えていた（χ^2=6.530,df=2,p<.05）。年齢が上がるにつれ、また、保護期間が長くなるにつれ、外出できない不自

由さをストレスに感じているようである。自由記述では、「自由に外出できない」「外で遊べない」ことを嫌なこととして挙げているものが多くみられた。また、嬉しかったこととして、「所外活動」「外出ができること」「今まで行ったことない所につれていってもらった」「プールに行けること」「スポーツができる」と、特別な外出やスポーツを挙げている子どもも多かった。

「楽しく遊ぶことはできるか」を尋ねたところ、「よくできる」が 50.6%、「時々(少し)できる」が 30.6%と、合わせて 8 割以上に上った(表 26)。一方、「あまりできない」は 11.6%、「全くできない」は 6.0%であった。「大切にされている」とのクロス集計では、「楽しく遊ぶこと」が「できる」と回答した子どもたちの 72.2%が「大切にされている」と感じ、「楽しく遊ぶこと」が「できない」と回答した子どもたちの 50.7%とは、有意差がみられた(χ^2=13.169,df=1,p<.01)。

「暴れる人がいたりして、こわいと感じることがあるか」(以下、「こわいと感じること」とする)を尋ねたところ、「よくある」が 17.2%、「時々(少し)ある」と「あまりない」がそれぞれ 16.9%であり、「全くない」が 47.8%と約半数を占めた(表 27)。子どもたちの「学校」とのクロス集計では、小学生の 45.0%と半数近くの子どもたちが怖さを感じていることがわかった。一方、中学生においては、28.0%、高校生においては 25.6%が「ある」と答え、より小さな子どもたちの方が怖さを感じているようである(χ^2=13.666,df=2,p<.01)。また、保護期間が 2 週目までの子どもたちの 27.9%、3 週目以上の子どもたちの 38.7%が「ある」と回答していた(χ^2=5.323,df=1,p<.05)。これをさらに、3週目までと 4 週目以上とで区切ると、3 週目までの子どもたちの 29.7%が、4 週目以降の子どもたちの 40.2%が「ある」と回答しており(χ^2=5.180,df=1,p<.05)、保護期間が長くなるつれ暴れる人がいて怖いと感じる傾向があるといえる。また、子どもたちの「居室」とのクロス集計では、個室で寝ている子どもの 26.2%、2～3人部屋の 23.5%、4 人部屋の 45.2%、5 人以上の部屋の 35.4%が「こわいと感じること」が「ある」と回答していた(χ^2=15.725,df=3,p<.01)。4 人部屋の子どもたちの割合が一番高く、必ずしも大人数で寝ているからといって怖さを感じているわけではないが、1人～3人部屋の子どもの方が「こわいと感じること」が少ないといえる。

⑤ 職員からのアプローチについて

設問16～設問21については、一時保護所入所前も含めて、子どもたちが自分の状況や今後についてどの程度認識をもっていることが、精神的な安定につながるかを確認するために設けた設問である。

「ここでの生活での、あなたの希望や不満について、職員の人は話を聞いてくれるか」(以下、「話をきいてくれる」とする。)と尋ねたところ、「よくある」が 34.8%、「時々(少し)ある」が 31.8%、「あまりない」が 17.4%、「全くない」が 12.1%であり、約7割の子どもが話をきいてもらえていると感じている一方で、約3割の子どもたちはきいてもらえていないと感じていることがわかった(表 28)。「大切にされている」とのクロス集計の結果、職員が「話をきいてくれる」と感じている子どもの 81.1%は「大切にされている」と感じているのに対し、「話をきいてくれる」ことが「ない」と感じている子どもで「大切にされる」とことが「ある」感じているのは 39.2%、「ない」と感じているのは 60.8%と、明らかな有意差がみられている(χ^2=70.288,df=1,p<.01)。また、職員が「話をきいてくれる」ことが「ある」と回答した子どものうち、職員が「反抗あり」と感じている子どもは 14.9%なのに対し、「話をきいてくれる」ことが「ない」と回答した子どもたちの 26.1%が「反抗あり」と感じており(χ^2=6.610,df=1,p<.05)、話をきいてもらっている実感が強い子どもほど職員から「大切にされている」と感じ、職員に対する反抗も少ない傾向があるといえる。また「話をきいてくれる」と感じている子どもほど、一時保護所で楽しいことが「ある」と感じ(χ^2=4.891,df=1,p<.05)、また嫌なことが「ない」と感じる(χ^2=7.302,df=1,p<.01)

傾向もある。

「ここに来る前に一時保護所はどのような所なのか、担当の人から話をされたか」(以下、「保護所の説明」とする。)を尋ねたところ、「された」が 45.7%、「少しされた」が 26.9%、「ほとんどされなかった」が 10.2%、「されなかった」が 14.6%となった(表 29)。「大切にされている」とのクロス集計の結果、「保護所の説明」を「された」と回答した子どもの 72.8%が職員に「大切にされている」と感じることが「ある」と回答し、「されなかった」と回答した子どもの 55.2%と有意差がみられた(χ^2=11.194,df=1,p<.01)。また、中学生と高校生は 9 割以上の子どもが「保護所の説明」を「された」と回答しているのに対し、小学生は 78.5%と 8 割弱にとどまり有意差がみられた(χ^2=17.409,df=2,p<.01)。小学生であっても年齢にあった分かりやすい説明や案内が求められる。

「ここには、だいたいいつまでいなければならないのか、担当の人から話をされたか」を尋ねたところ、「された」が 38.1%、「少しされた」が 24.4%、「ほとんどされなかった」が 12.5%、「されなかった」が 23.0%であった(表 30)。この項目は、子どもたちの属性や他の設問項目の回答との有意差は特にみられなかった。保護期間の説明については、他の説明等と比べ肯定的な回答の割合が低くなっている。保護期間は未定の場合も多いが、具体的な日時というよりは、どのような状況になったら退所できるのか、といった内容の説明も含めて尋ねたつもりではあったが、子どもたちには設問自体があいまいであった可能性もある。

「児童相談所のあなたの担当の人は、1 週間にどのくらい会いに来てくれるか」を尋ねたところ、「1 回」が 40.6%、「2～4回」が 35.3%、「5 回以上」が 5.8%、「1度も来てくれない」が 10.2%であった(表 31)。自由記述欄には、「ケースワーカーが来て話をしてくれる時」や「ワーカーさんと面接したいときに面接してくれる事」が嬉しいとの記述がある一方で、「もっと児相の人に来てほしい」との要望を挙げる子どももいた。

「なぜここに来ることになったのか、担当の人から話をされたか」を尋ねたところ、「された」が 64.5%、「少しされた」が 19.5%、「ほとんどされなかった」が 3.0%、「されなかった」が 9.5%であり、保護理由については一時保護所入所前に 9 割近くの子どもたちが説明を受けていると感じていることがわかった(表 32)。中学生、高校生はそれぞれ 9 割以上の子どもたちが説明を受けたと感じている一方で、5 人に 1 人の小学生は説明を受けていないと回答しており、「保護所の説明」と同様の傾向がいえる。

「ここを出た後のことについて、児童相談所の担当の人はあなたの気持ちを聞いてくれるか」(以下、「退所後の希望」とする。)を尋ねたところ、「よくある」が 40.6%、「時々(少し)ある」が 31.8%、「あまりない」が 8.8%、「全くない」が 9.5%であり、約 8 割の子どもたちが自分の今後の生活について意向確認をされていると感じていることがわかった(表 33)。一方、男子の 26.1%、女子の 14.1%が「退所後の希望」をきいてもらえていないと感じており、女子よりも男子の方が退所後の希望を聞いてもらえていないと感じる割合が高くなっている(χ^2=8.827,df=1,p<.01)。また、「大切にされている」とのクロス集計の結果、「退所後の希望」を聞いてもらえていると感じる子どもたちの 73.2%が職員から「大切にされている」と感じ、「退所後の希望」をきいてもらえていないと感じている子どもたちのそれは 49.4%と、その割合が大幅に下がっている(χ^2=16.287,df=1,p<.01)。自由記述においては、「もっと人のはなしをきいてほしい」「もう少し自分の希望を聞いてほしい」ことを要望しているものがある一方で、「泣いている時に先生が何でもはなしを聞いてくれたこと」「担任の先生がよく話を聞いてくれること」「ケースワーカー以外の人でも私の気持ちをすなおにうけとめてくれて相談にのってくれる」「先生があそんでくれるしはなしを少しきいてくれる」ことを嬉しいこととして挙げている子どもたちもいて、身近な

大人に裏切られた経験をしている子どもたちも多いと思われる中、大人が少しでもじっくり話をきいてくれたり気持ちをうけとめてくれたと感じられる経験というのは、「大切にされている」と実感できる大きな要素であるといえる。

⑥ 一時保護所の満足度

「ここでの生活は、100 点満点中何点くらいか」を尋ねたところ、回答は－100 点から1000 点までと幅広く、100 点の枠を超えた回答も多かったが、そのまま適用した。全体的には 60 点未満という回答が全体の約半数を占めた。60 点以上 80 点未満は、全体の約 15%、80 点以上が全体の約3割を占めている。中には、100 点以上をつけた子どもも約 1 割いた(表 35)。この設問で、80 点以上の得点をつけた子どもたちを「満足度の高い群」、80 点未満をつけた子どもたちを「その他の群」と分類し、子どもたちの属性及び他の設問とのクロス集計を行った。すると、有意差がみられる項目が多くみられた。

まず、言えることとしては、一時保護所の満足度の高い子どもたちは、職員から「大切にされている」という実感を高く感じている傾向があるということである。「満足度の高い群」の子どもの 82.4%が「大切にされている」と感じているのに対し、「その他の群」は 60.8%と明らかな有意差がみられた(χ^2=19.825,df=1,p<.01)。

また、「学校」が上がるつれ、一時保護所の満足度は低くなっている。「満足度の高い群」は、小学生の 46.0%に対し、中学生では 30.1%、高校生以上(その他を含む)では 16.7%と明らかに低くなる傾向がある(χ^2=16.895%,df=2,p<.01)。

また、「保護期間」が長くなるにつれて、満足度は低くなる。「満足度の高い群」の子どもたちは、保護週数が 1 週目の子どもたちの 48.1%、2 週目では 34.6%、3 週目では 30.9%と減少している(χ^2=7.979,df=2,p<.05)。

「楽しい事がある」または「嫌な事がない」と回答した子どもたちの満足度は、高い傾向がみられた。「満足度の高い群」の子どもたちの 94.3%が「楽しい事」が「ある」と回答し、「その他の群」の子どもたちの 73.8%と大きな差がみられた(χ^2=24.894,df=1,p<.01)。一方、「嫌な事がある」と回答した子どもたちのうち、「満足度の高い群」の子どもたち 22.4%であったのに対し、「その他の群」は 77.6%となり、やはり有意差がみられた(χ^2=49.368,df=1,p<.01)。

また、子どもたちの精神安定度と比較してみると、「満足度の高い群」の子どもたちは、よく眠れることが「ある」と回答していたり、イラつくことや悲しくなることが「ない」と回答する傾向が高く、それぞれ有意差がみられている(「眠れる」:χ^2=5.724,df=1,p<.05 、「イライラする」:χ^2=31.569,df=1,p<.01 、「悲しくなる」:χ^2=13.804,df=1,p<.01)。満足度の高い子どもたちは精神的な情況が安定している傾向があるといえる。

サービス・設備面に関する項目では、「満足度の高い群」の子どもたちは、「食事はおいしい」、「勉強を教えてもらえる」、「楽しく遊べる」と感じ、「外出できずイライラする」と感じていはいない傾向があり、それぞれ有意差がみられた。「食事はおいしい」と感じているのは「満足度の高い群」の 95.8%に対し、「その他の群」では 85.6%(χ^2=9.880,df=1,p<.01)、「勉強を教えてもらえる」と感じているのは「満足度の高い群」の 90.6%に対し、「その他の群」では 80.3%(χ^2=7.024,df=1,p<.01)、「外出できずイライラする」と感じているのは「満足度の高い群」の 40.1%に対し、「その他の群」では 68.2%(χ^2=29.879,df=1,p<.01)、「楽しく遊べる」と感じているのは「満足度の高い群」の 95.8%に対し、「その他の群」では 74.2%(χ^2=28.723,df=1,p<.01)であった。ここでの保護所におけるサービスや設備面に関する設問は、多少の工夫で改善できそうな項目であり、それらの工夫により子どもたちの満足度の向上の可能性がありそうである。

職員からのアプローチに関する項目で明らか

な有意差がみられたのは、「希望や不満をきいてもらえる」と「退所後の希望をきいてもらえる」の 2 項目であった。職員に「希望や不満をきいてもらえる」と感じているのは、「満足度の高い群」の 82.0%に対し、「その他の群」は 62.5%（χ^2=16.145,df=1,p<.01）、「退所後の希望を聞いてもらえる」と感じているのは、「満足度の高い群」の 86.6%に対し、「その他の群」の 77.1%（χ^2=4.896,df=1,p<.05）となった。自分の気持ちを聞いてもらえていると感じている子どもほど、保護所における満足度が高くなる傾向があるといえる。

⑦ 嬉しかったこと

アンケートの最後に、自由記述で 3 点について尋ね、それぞれの回答を5～6のコードに分類した。

まず、「ここでの生活でうれしかったのは、どんなことか」を尋ねた。その結果、「他の子どもとの関わり」に関する記述が 26.0%、「遊びや活動」に関する記述が 18.9%、「職員」に関する記述が 11.8%、「食事や生活」全般に関する記述が 10.6%、「その他」は 8.1%、「無し」という回答は 14.1%であった（表38）。また、約2割の子どもたちは無回答で記述がなかった。

具体的な記述としては、「みんなとはじめてあった時に『あそぶ？』とかきかれてうれしかった」「新しい友達ができたこと」「友だちがすぐにできたこと、いろんなことをおしえてくれる」「ここでみんなと一緒に生活ができることがうれしい」など、子ども同士の関わりによる内容や、「しょうぎ」「ゲームやまんが」「たくさんの本が読める」「お楽しみ会」「ちょうりじっしゅう」などの具体的な活動内容が挙げられているものが多かった。また、「野球を先生とできたこと」「先生が、・・・卓球をしたりスポーツにつき合ってくれる」「先生とかみんなでトランプとかできたこと」と、職員が遊びに「付き合ってくれる」ことが嬉しいと感じたいり、「先生にやさしくされたこと」「先生に CD かしてといったら、こんどくるときもってきてくれる」「ほめられたとき」「誕生日を祝ってくれたこと」など、職員の何気ない働きかけから「ここのみんなといっぱいあそべたり、学生さんもいっぱいあそんでくれるし、外出も多いし、職員さんも遊んでくれるし、ここの生活はうれしい事のほうが多い」と感じている子どももいた。また「食事や生活」全般に関する記述では、既述の勉強面や食事面での記述と共に、「生活のずれを直してくれた」「正しい生活に戻せた」「きそくただしい生活ができた」「きちんと目標がたっせいできた」という内容がみられ、子ども自身が一時保護所での生活に意味を見出していると思われる様子もうかがえた。その他、「朝、必ず誰かがおこしに来てくれる」「学校の先生にあえるときとか、めんせつのとき」「自分とおなじ人がいっぱいいる」「自分のことをよく考えられる時間がある」といった内容と共に、「人として関わる大切さに気づいたこと。先生方がしんけんに思ってくれていること」「人として尊重してくれることや、頼ってくれるところ」といった、職員からの、自己肯定感が高められるような働きかけが嬉しいと感じたり、「親とはなれられること。友達と出会えたこと」「友達が増えて親と会わなくなった」「親からはなれられたこと」など、家族と離れたことを嬉しいと感じている記述もみられた。

⑧ 困ったり嫌なことがあったとき

次に、「ここでの生活で困ったり嫌なことがあった時は、どうしているか」を尋ねたところ、「一人で我慢したり諦める」といった記述が 24.9%と一番多く、全体の 4 分の1を占めた。「職員」へ告げたり助けを求めるといった記述は 21.9%、「他の子どもへ」相談するといった記述が9.9%、「物へ当たったり運動する」といった記述が 6.9%、「その他」として困ったことの具体的な内容についての記述が書かれていたものが 9.9%、困ったことは無いなど「無し」との回答が 16.6%、無回答が17.5%であった（表39）。4人に一人の子どもたちが、困った時には周りにそれを表すことなく一人で我慢したり諦めているということに

なる。

自由記述欄には、困ったり嫌なことがあったりした時は、「一人でたえる」「一人でがまんする」「自分とそうだんしている」「あきらめる」「泣いている(たまに。)」「心におしこめる」「部屋にとじこもる」「ふとんにくるまる」「なく、さけぶ」「忘れようとする」など、問題を一人で抱えて我慢したり、諦めている様子がうかがえた。また、「一人でその不満をためこんでしまって、相手にあたることもあるし、どうしようもならない時は一人で泣いてしまう」「自分の心の中で止めておく。人にあたらないように頑張っている」など、子どもなりに努力していることがよく伝わる記述もみられた。「ためてイライラする(先生にいいにくい)」という記述もあったが、一方では、「先生にきいてもらってる」「言いやすい職員さんや学生さんに相談する」「一番しんようしている先生に時々相談する」「ケースワーカーの人に相談」など、5人に1人の子どもたちは職員を頼りにしていることもわかる。なかには、「あばれて、話をきいてもらっている」「まずは泣いて話を聞いてもらう」と、暴れたり泣いたりといった行動をとらないと職員に関わってもらえないというような、一時保護所の現状が垣間見える記述もみられた。その他、「友達に話をする！」「日記に書いてみたり、友達に相談したり」「同じ部屋の子に聞いてもらう」など、友達に相談しているという子ども、「たちむう!」「物やカベなぐる」「まくらをたたく」「サンドバックをなぐる」など、物にあたってストレスを発散させようとしている様子がうかがえた。一方、わずかではあるが、「バスケットをするかつるをおっている」「とにかく運動をする」「好きなことをする。自分の場合、絵をかいたりして、気分を変える」と、自分なりのストレスへの対処方法を記述していた子どももいた。集団生活で、今後の生活への見通しがもてない環境のなか、子どもたちがストレスを抱えていることは一時保護所では当たり前といえる。ただ、子どもたちは、それをことばで表現せずに暴れて反抗したり物にあたるといった行動で示したり、または、我慢したり、諦めたりすることに慣れてしまっているのではないだろうか。子どもが、そのような時に一人になれる空間も必要であるが、それと同時にまずは、子どもの気持ちを周りの大人が気づき、認めていくと共に、嫌なことがあったときにどのように対処したらよいか、その方法を子どもたちに教えていく必要もあるといえよう。

⑨　子どもたちの要望

最後に、「ここでの生活で、『こうして欲しい』と思うことは、あるか」」と尋ねた。その結果、「規則や生活」全般に関する記述が4割弱の37.1%みられた。「設備」に関する記述が 10.4%、「その他」の記述が 13.4%、また要望は無いといった「無し」との回答は24.7%、無回答が20.7%であった(表40)。

具体的な記述には、「外出をもっとしたい」「外で遊びたい」「寝る時間をもうちょっと遅くしてほしい」「自由時間をもっと増やしてほしい」「おふろにもっとはいりたい」など「家なら普通にできることをいろいろとここでもさせてほしい」という生活規則に関すること、「もっと大きい人が読む本、ビデオ、楽しめる活動をふやしてほしい」「あそぶもの(しょうぎやウノ)などのしゅるいやかずをふやしてほしい」「スリッパをかえてほしい」「最近のマンガをふやしたらイイと思う」「男子と女子のトイレをべつべつにしてほしい」といった設備面に関すること。また「1つの部屋をつくって、ひとりになったり相談を聞いてくれるといい」「かぎを閉めすぎ。気持ちが重くなる。悪いことしたわけじゃないのに」「もっとぼうりょくがないようにしてほしい」「自分たちだけの意見ばかり(行動も)やらないでほしい」といった職員への要望もみられた。

また、全体の約 45%の子どもたちからは具体的な要望の声がなかったことになる。これは、現状の居場所に満足しているということなのか、一方で、ほんの数人ではあるが「あるけど言わない」「あったとしてもなんもなんない」「書いて言っても、けっかは無理だと思うので」というような、

諦めともいえる声がみられた。これは、このアンケートに答えることで現状の生活の変化は期待できないという思いがあるのかもしれないが、子どもたちの中には既に、保護所に来る以前の生活環境も含めて諦めることに慣れてしまっているともいうことができるのではないだろうか。

8. 考察

(1)「大切にされている」という実感

子どもたちによる一時保護所の総合得点には大きな開きがみられたが、そのなかで特に満足度の高い子どもたちの多くは、職員から「大切にされている」と感じていることがわかった。職員から「大切にされている」と感じられるということは、一時保護所での生活が、その子どもにとっては、少なくとも安心感を得ることができる場であるということだと思われる。そしてそれは、一人ひとりの子どもの権利が守られていることであるといえる。

子どもの権利条約でもうたわれているように、子どもたちには、遊ぶ権利、教育を受ける権利、意見表明する権利、自分の援助方針について知る権利などが保障されるべきである。アンケートの設問項目には、このような、子ども一人ひとりに保障されるべき権利に関する項目が幾つか設けられている。一時保護所での生活を余儀なくされている子どもたちはなおさら、一人ひとりが大切にされているという実感がもてるよう、権利が保障されることが必要である。そしてそれには、一時保護所内でのケアだけでなく、一時保護所に入所する前の時点から、なぜ、一時保護所で生活しなければならないのか、一時保護所とはどのような所なのかという丁寧な説明と共に、入所中のケアや意向確認等によって、子ども自らが、一時保護所での生活によって「自分と同じ人がいっぱいいること」に気付いたり、「自分のことをよく考えられる時間がある」「生活のズレが直せた」「人とかかわる大切さに気づいたこと。先生方がしんけんに思ってくれていること」など、一時保護所に来て良かったと振り返ることができるのではないのだろうか。

(2)一時保護所の満足度

満足度の高い子どもたちは、よく眠れ、イラつくことや悲しくなることが少ないなど、精神的な情況が安定している傾向がみられた。また、「食事はおいしい」、「勉強を教えてもらえる」、「楽しく遊べる」など、サービス面での満足とも関連があった。

なかでも、「満足度の高い群」の子どもたちの94.3%が「楽しい事」が「ある」と回答していることからもわかるように、子どもが「楽しい」と感じる遊びや、誕生会、プール、花火大会、所外レクリエーションなど、子どもたちがワクワクするような活動を増やしていくことは、子どもならではの遊ぶ権利しっかりと保障することになり、満足度を高くすることになるといえよう。

また、「ここでの生活の希望や不満をきいてもらえ」たり、「退所後の希望をきいてもらえる」と回答している子どもたちほど満足度が高かった。「家とかでのコトとか、色々話をきいてもらえる」「自分の話をきいてくれる先生や担当がいること」「先生がよく話をしてくれるところです。卓球をしたりスポーツにつきあってくれるところです」という記述からもわかるように、大人がじっくり自分の話を聞いてくれたり、また遊びに付きあってくれることにより、大切にされている実感が得られ、満足度も高くなるといえる。

一方で、「保護期間」が長くなるにつれて、また、「学校」が上がるつれ、一時保護所での満足度は低くなる傾向がみられた。「保護期間」の長さにより、イラつき、悲しみが増える傾向があり、「保護所にいるのが長い人だけの外出(サーカス、野球のしあい)」が嬉しい、といった子どもの記述にもみられるように、集団生活のなかとはいえ、個々の子どもの情況に合わせた対応により、子どもの大切にされている実感に変化が出てくるであろう。

(3)子どもたちの「我慢」と「諦め」

4 人に一人の子どもたちが、困ったり嫌なことがあった時には、「一人でがまんする」「あきらめる」「心におしこめる」など、問題を一人で抱えて我慢したり、諦めたり、「自分の心の中で止めておく。人にあたらないように頑張っている」といった記述をしていた。「お母さん、お姉さん的な存在ができた。自分の気持ちが少しずつ言えるようになった」という子どもの記述にみられるように、一時保護所で生活している子どもたちの多くは、自分の気持ちをなかなか言葉で表現できず、一人で我慢したり諦めたりすることに慣れているといえるのではないのだろうか。

一方で、「あばれて、話をきいてもらっている」という記述もみられた。逆を返せば、暴れないと職員に話を聴いてもらえないと子どもが感じているとも言え、一時保護所の職員の余裕の無さが垣間見えてくる。子どもが、「暴れても聴いてもらえない」といった諦めを感じる前に、個々の子どもにきちんと向き合い、丁寧に関わっていけるような、そんな一時保護所のあり方が問われている。

一時保護所が、少しでも多くの子どもにとって、「人として尊重してくれるところ」であり、「ささえてくれる人たちがいたこと」に気付け、子ども自身が「大切にされている」と実感できるような場となるためには、まずは、私たち大人が、もっと子どもたち自身の声に耳を傾けていく必要があるだろう。ただ、現状では、そのような余裕がもてない環境であることが問題なのである。だからこそ、一時保護所での生活が、子どもたちの、大人への信頼感の回復と共に、新たな人生をスタートさせるきっかけとなれるような環境を整えていくことが急務といえる。

(4)アンケートの今後の可能性

このアンケートですべてが言えるわけではもちろんなく、アンケート実施の意図や設問項目等、本当に子どもたちにとって分かりやすかったといえるのか、課題は残る。

今後、このような調査を行う場合は、今回の自由記述をもとに、「嬉しかったこと」「困ったり嫌なことがあった時にどうするか」「要望」等について、選択肢から回答するようにすることで、より具体的なデータを得られると共に、子ども自身の負担も軽減できるのではないかと思われる。また、子どもが一時保護所での生活を振り返り、子ども自らが保護所での生活した意味を肯定的に捉えられるような項目があると、アンケートに答えることで子ども自身に気付きを与えることになであろう。更に、アンケートの実施の趣旨の子どもへの告知や、実施方法の統一、また、職員向けアンケートの回答にもあったように、実施日を特定せずに実施しやすくする等、実施条件を再検討していく必要もあるだろう。

職員の、「・・・このようなアンケートを実施し、子ども達の声を生で拾っていくことで今後の改善につながっていく可能性があることはとてもよいことであると思う。」「保護所での生活について積極的に意見表面する契機になればと思う。」といったコメントは、当事者である子どもたち声をくみとり社会に代弁していく役割を意識したものであるといえる。まさに、子どもと触れ合う大人が、子どもの権利擁護の実践者として意識できるかが問われているといえよう。

（資料）

1．子ども用調査の実施方法について

表1 実施の趣旨について

賛成	やや賛成	やや反対	反対	無回答	合計
41	17	6	2	3	69

表2 実施の状況

全員	一部	実施なし	無回答	合計
40	13	16	0	69

表3 実施の方法

いっせい	数人ずつ	個別に	無回答	合計
42	2	8	1	53

表4 実施者(複数回答あり)

児童指導員	保育士	一保心理士	学習指導員	児童福祉司	児童心理司	一保課長	その他
25	9	1	3	1	2	19	3

表5 実施した時間帯

学習	自由	日記	その他	合計
36	15	0	2	53

表6 説明等について

読上げ	説明し読上げ	子どもに任せた	質問のみ説明	その他	無回答	合計
10	10	8	15	8	2	53

表7 実施した感想

よい	ある程度よい	あまりよくない	よくない	無回答	合計
17	25	5	0	6	53

表8 今後の実施について

すでに実施	検討	困難	その他	無回答	合計
8	17	7	18	3	53

表9　8月3日の入所児童数(幼児～中卒児)

	男	女	合計
幼児	107	133	240
小学生	227	181	408
中学生	164	157	321
中卒児	31	34	65
合計 (幼児除外)	529 (422)	505 (372)	1034 (794)

2. 回答者の属性

表 10 性別

	度数	パーセント
男	224	52.0
女	207	48.0
合計	431	100.0

表 11 年齢

	度数	パーセント
9	36	8.4
10	52	12.1
11	65	15.1
12	55	12.8
13	85	19.7
14	75	17.4
15	41	9.5
16	13	3.0
17	8	1.9
18	1	.2
合計	431	100.0

表 12 学校

	度数	パーセント
小学校	169	39.2
中学校	218	50.6
高等学校	29	6.7
その他	3	.7
行っていない	12	2.8
合計	431	100.0

表 13 主訴

	度数	パーセント
養護	93	21.6
虐待	169	39.2
非行	90	20.9
その他	53	12.3
無回答	26	6.0
合計	431	100.0

表 14 週数

	度数	パーセント
1 週目	89	20.6
2 週目	86	20.0
3 週目	65	15.1
4 週目	44	10.2
5 週目	41	9.5
6 週目	21	4.9
7 週目	29	6.7
8 週目	12	2.8
9 週目	12	2.8
10 週目	6	1.4
11 週目	3	.7
12 週目	4	.9
13 週目	3	.7
15 週目	1	.2
16 週目	5	1.2
17 週目	2	.5
18 週目	3	.7
20 週目	1	.2
22 週目	1	.2
24 週目	2	.5
無回答	1	.2
合計	431	100.0

3. 子どもたちの意識

表 15 楽しい事はありますか？

	度数	パーセント
よくある	163	37.8
時々(少し)ある	180	41.8
あまりない	54	12.5
全くない	24	5.6
無回答	10	2.3
合計	431	100.0

表 16 嫌な事はありますか？

	度数	パーセント
よくある	115	26.7
時々(少し)ある	153	35.5
あまりない	83	19.3
全くない	66	15.3
無回答	14	3.2
合計	431	100.0

表 17 よく眠れますか？

	度数	パーセント
よく眠れる	114	26.5
まあまあ眠れる	181	42.0
あまり眠れない	106	24.6
全く眠れない	26	6.0
無回答	4	.9
合計	431	100.0

表 18 イライラすることはありますか？

	度数	パーセント
よくある	161	37.4
時々(少し)ある	159	36.9
あまりない	54	12.5
全くない	53	12.3
無回答	4	.9
合計	431	100.0

表 19 とても悲しくなることはありますか？

	度数	パーセント
よくある	93	21.6
時々(少し)ある	137	31.8
あまりない	106	24.6
全くない	91	21.1
無回答	4	.9
合計	431	100.0

表 20 頭痛腹痛はありますか？

	度数	パーセント
よくある	160	37.1
時々(少し)ある	166	38.5
あまりない	94	21.8
全くない	7	1.6
無回答	4	.9
合計	431	100.0

表 21 大切にされていると感じることはありますか？

	度数	パーセント
よくある	107	24.8
時々(少し)ある	181	42.0
あまりない	85	19.7
全くない	48	11.1
無回答	10	2.3
合計	431	100.0

表 22 食事はおいしいと感じますか？

	度数	パーセント
よくある	259	60.1
時々(少し)ある	122	28.3
あまりない	32	7.4
全くない	12	2.8
無回答	6	1.4
合計	431	100.0

表 23 一人になりたい時になれますか？

	度数	パーセント
なれる	143	33.2
少しなれる	116	26.9
あまりなれない	92	21.3
全くなれない	69	16.0
無回答	11	2.6
合計	431	100.0

表 24 勉強を教えてもらえますか？

	度数	パーセント
よくある	203	47.1
時々(少し)ある	147	34.1
あまりない	48	11.1
全くない	18	4.2
無回答	15	3.5
合計	431	100.0

表 25 外出や運動できずイライラしますか？

	度数	パーセント
よくある	141	32.7
時々(少し)ある	105	24.4
あまりない	66	15.3
全くない	115	26.7
無回答	4	.9
合計	431	100.0

表 26 楽しく遊べますか？

	度数	パーセント
よくできる	218	50.6
時々(少し)できる	132	30.6
あまりできない	50	11.6
全くできない	26	6.0
無回答	5	1.2
合計	431	100.0

表 27 暴れる人がいてこわいと感じますか？

	度数	パーセント
よくある	74	17.2
時々(少し)ある	73	16.9
あまりない	73	16.9
全くない	206	47.8
無回答	5	1.2
合計	431	100.0

表 28 希望や不満について聞いてくれますか？

	度数	パーセント
よくある	150	34.8
時々(少し)ある	137	31.8
あまりない	75	17.4
全くない	52	12.1
無回答	17	3.9
合計	431	100.0

表 29 一保はどのような所か話をされましたか？

	度数	パーセント
された	197	45.7
少しされた	116	26.9
ほとんどされなかった	44	10.2
されなかった	63	14.6
無回答	11	2.6
合計	431	100.0

表 30 いつまでいるのか話をされましたか？

	度数	パーセント
された	164	38.1
少しされた	105	24.4
ほとんどされなかった	54	12.5
されなかった	99	23.0
無回答	9	2.1
合計	431	100.0

表 31 担当の面会回数は(1週間)？

	度数	パーセント
1回	175	40.6
2～4回	152	35.3
5回以上	25	5.8
1度も来てくれない	44	10.2
その他	12	2.8
無回答	23	5.3
合計	431	100.0